

# 分娩方法と産後うつ傾向との関連 —子どもの健康と環境に関する全国調査—

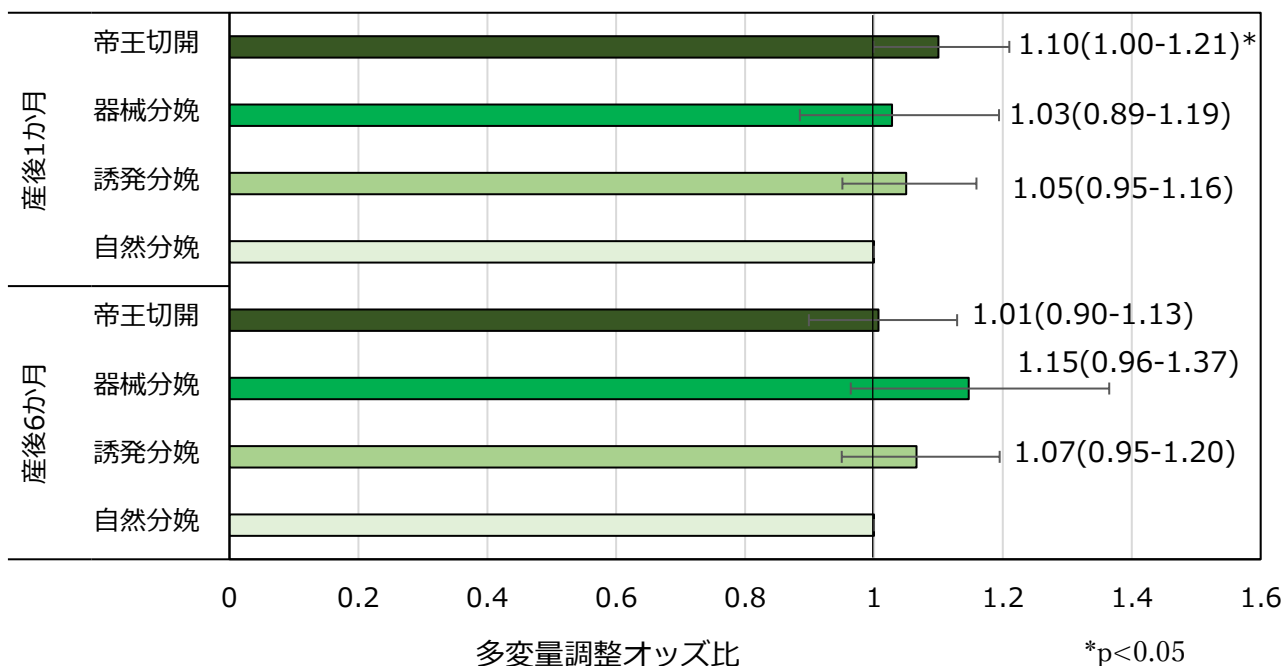
馬場 幸子

分娩方法は、産後うつのリスクファクターとなることが示唆されていますが、大規模な疫学調査ではあまり検討されてきませんでした。そこで本研究では、分娩方法と、産後1か月及び6か月における産後うつ傾向との関連について検討しました。その結果を、専門誌に発表しました。(Journal of Epidemiology 先行掲載)

単胎生児を出産した妊婦 89,954 名を対象として、分娩方法と産後うつ傾向との関連について分析しました。産後うつ傾向は、エジンバラ産後うつ質問票を用い評価し、13 点以上(世界的に使用される基準)と定義しました。出産時までの背景要因を調整した多変量ロジスティック解析を行い、自然分娩を基準として、帝王切開、器械分娩、誘発分娩について産後うつ傾向のオッズ比(OR)及び 95%信頼区間(CI)を算出しました。

89,954 名の妊婦のうち、産後1か月で 3.7%、産後6か月で 2.8%が産後うつ傾向でした。自然分娩と比較して、帝王切開は産後1か月の産後うつ傾向のリスクの増加とわずかに関連しましたが、産後6か月では統計学的に有意な関連は認められませんでした(図1)。また、1 か月時で見られた関連は授乳方法を調整すると弱くなりました。(OR=1.07, 95%CI: 0.97-1.17)

図1. 分娩方法と産後うつ傾向との関連



本研究の強みとして、産後1か月及び6か月の2時点の産後うつ傾向リスクとの検討を行った点が挙げられます。また、本研究の限界として、緊急帝王切開と選択的帝王切開を区別せずに解析している点や産後うつ傾向は質問票による自己回答であり医師の診断によるものでない点などが挙げられます。

本研究により、帝王切開は産後1か月の産後うつ傾向のリスク増加とわずかに関連するが、その関連は産後6か月以降では継続して見られない可能性が示されました。